ART発、プリアンプ搭載

最新オーディオ・インターフェイスの検証

どんなオーディオ・インターフェイスを買えばいいのか…。これからパソコンを使ったオーディオレコーディングを始める人だけでなく、すでにバリバリのDAWユーザーであっても頭を悩ませる問題なのではないだろうか。そこで今回は、ARTから最近発売されて間もない高品位で「使える」オーディオ・インターフェイス2モデルを紹介していく。ARTと言えばTube MPシリーズなどリーズナブル/コンパクトサイズでありながら、12AX7真空管を搭載して手軽にデジタルレコーディングに真空管ならではのウォームなサウンドを実現したプリアンプでお馴染みのブランド。そんなプリアンプに定評のあるブランドが作ったオーディオ・インターフェイスにはいったいどのような魅力が隠されているのだろうか。（文：鈴木悠平）

持ち運びに最適なUSB Dual Pre

最初に紹介するのが重さ約600gという片手に収まるコンパクトサイズながら、プロフェッショナルレベルのオーディオレコーディングが可能なUSB Dual Pre。最近は各社から本製品のようなモバイル用途を意識したコンパクトサイズのオーディオ・インターフェイスが次々と発売されてきているので、現在の注目カテゴリーと言っていいだろう。基本スペックを見ていくと2イン2アウトのUSB接続タイプで、入力はXLRキャノンとTRSフォンのコンボジャックが2系統、アウトプットはTRSフォンとステレオ・ミニタイプのヘッドフォンアウトというシンプルな構成だ。

やはり注目すべきはマイクプリアンプ部。手のひらに収まるほどのサイズながらゲインレンジは最大48dBという本格的なもので、ファンタム電源にもしっかりと対応。そしてフロントパネルには入力端子の他にLEDの点灯で信号の過入力を知らせてくれるクリップインジケーターと、入力チャンネルごとに独立したゲインつまみを2系統搭載している実用的なレイアウトとなっている。もちろんマイクレコーディングはもちろんのことシンセサイザーなどのステレオ楽器の接続も可能なのでラインレコーディング中心の宅録アーティストやソロユニットなどにちょうど良い。ちなみにメインステレオアウトに当たるバランスタイプのモニターアウトとヘッドフォンアウトの信号はプリアンプからのダイレクト出力とパソコンからのプレイバックの音量バランスをつまみ一つで調整できるミックスバランス・コントロールを備えているので、パソコンを使ったオーディオレコーディングで問題となるレイテンシーを気にすることなくモニタリングできるというのも重要なポイントになるだろう。

また驚くべきは電池駆動も可能であるということだ。こういったタイプの製品のほとんどはACアダプターとUSBバスパワーの2ウェイ駆動がほとんどなのだが、USB Dual Preは9V電池での駆動もOKなのだ。電池使用時にもおよそ50時間と十分な駆動時間を確保しているし、どの駆動方法であってもファンタム電源を含むすべての機能が使用可能（電池駆動、ファンタム電源使用時の動作時間はおよそ20時間）なので使用用途や場所を問わずに活用できること間違いなしだ。

非常にシンプルなUSB Dual Preはスタジオでのバンドの練習風景や一発録り、ギター/ボーカルのレコーディング、フィールドレコーディングなどノートパソコンと合わせてモバイルレコーディングに使用するのにぴったり。オーディオ・インターフェイスとしてのクオリティーと機能がこの価格帯では信じられないほど充実しているので、これからDAWソフトを使ったオーディオレコーディングを始めたい人のファーストモデルとして、さらにすでに他のオーディオ・インターフェイスを使用している人でも持ち運び用のサブシステムとしてもう一つ持っておくというのもオススメだ。本当にレコーディングに必要な機能だけをシンプルにまとめ、導入しやすい価格に抑えつつも重要なサウンドの面では妥協しない。そんなARTの意欲が伝わってくるような小型USBオーディオ・インターフェイスだ。

写真1　トップパネルには入力端子とゲインつまみ、クリップインジケーターを装備

写真2　背面パネルには出力関係がまとめられている

こだわり派のためのTube Fire 8

パソコンのDAWシステム中心の制作の場合、どうしてもサウンドからデジタル臭さが抜けずに頭を悩ませている人も多いのではないだろうか。続いて紹介するTube Fire 8はそんなサウンドに強いこだわりを持つ人にオススメな8チャンネル仕様の真空管プリアンプだ。えっ、オーディオ・インターフェイスじゃないの？という声が聞こえてきそうだが（笑）実はこのTube Fire 8単なる真空管プリアンプとしてだけではなく、パソコンとFireWireで接続すればそのまま8チャンネルのオーディオ・インターフェイスとして使うことができるという1台2役で活用できるという優れモノなのだ。

コダワリのプリアンプ

やはりプリアンプで人気のART製品。このTube Fire 8のポイントもそのプリアンプにある。特徴的なのがTube Fire8のプリアンプは透明なサウンドが魅力の入力ステージと、サウンドに真空管サウンドを加える真空管ステージに分かれており、ゲインとチャンネルアウトという2ボリューム構成になっているという点。これはどういうことか…。真空管というのは入力する音量レベルに対してドライブ量が変わってきてしまうために、チューブならではのウォームなサウンドを得るためには入力段である程度のレベルを稼いでおかなければならない。ただし、出力ゲインの違うマイクを同時に使う場合など、用途によっては他の入力との兼ね合いで真空管を十分ドライブさせられる音量を出せないというケースや、あえて真空管を通さない、ソリッドステートのクリアな音質が欲しいということもあるだろう。そんなときにTube Fire 8のように2ボリューム構成であれば、ゲインつまみで真空管のドライブ量を、チャンネルアウトつまみで各トラックごとの音量をコントロールすることができてしまうのだ。実際に試してみてもゲインを絞るとクリアで原音に忠実なソリッドステートなサウンド、ドライブを上げていくと暖かみのあるチューブサウンドが出てくるようになる。タイプの異なる2種類のサウン

写真3　マイクプリアンプらしい整然なデザインのトップパネル

写真4　背面パネルにはアナログ入出力とワードクロック、FireWireポートが並ぶ

ドを自在に操ることができるというのはこれまでのオーディオ・インターフェイスでは中々見られなかった画期的なアイディアではないだろうか。

このプリアンプ自体、ディスクリート・クラスA仕様で70dBという十分なゲイン幅が確保されているし、チャンネル1と2はギターやベースを直接接続することのできるインストゥルメント・インプットを装備、さらには適正な入力レベルの設定に必要不可欠なクリップインジケーター付きのLEDメーター、ラインレコーディングにも対応する-10dBのパッドスイッチ、ハイパスフィルターや位相を反転させるフェーズスイッチとマイクレコーディングに欠かせない機能もしっかり押さえられ、かなりの万能選手という印象を受ける。

モニタリング部分にも触れておくと、USB Dual Pre同様にマイクプリアンプからのダイレクト出力とパソコンからのDAWシステムのプレイバックがミックスされてフォーンアウトから出力されるというゼロレイテンシー仕様。また、レコーディング時に便利なモノミックスでのモニタリングも可能となっている。

写真5　プリアンプの基本がしっかりと押さえられている

さらなるシステム拡張も可能

このTube Fire 8は1台でも8チャンネルのオーディオレコーディングが可能となっているのだが、さらに最大4台までTube Fire 8を接続することで最大32チャンネルまで拡張することもできるのだ。接続も本体のFireWireポート同士を接続するだけと非常に簡単。さすがに32チャンネルを必要とするケースは希なことだと思うが、ドラムをマルチマイクでレコーディングしたい場合には8チャンネルでは少し不足を感じることもあるのではないだろうか。最近は小型化と同時に、多入出力化の進むオーディオ・インターフェイスではあるが、これはデジタル入出力も合算した数字であり、マイクを直接接続できる純粋なアナログ入力は8系統というモデルがほとんど。もしも入力チャンネル数以上のマイクで同時レコーディングを行いたい場合は、一度マイクをミキサーや外部プリアンプに入力し、ある程度音をまとめてからオーディオ・インターフェイスに入力してやる必要があったわけだ。そうするとレコーディング後のバランス調整やエフェクティングなどミックス作業に制限が出てしまい、マルチマイクの恩恵を最大限に受けることができない。そんな中、デイジーチェインに対応してアナログ入力を拡張できるという利点は非常に大きな意味を持っているのではないだろうか。

また、そこそこの多チャンネル対応のマイクプリアンプを別途で購入することを考えれば、実売価格でおよそ7万円というTube Fire 8の価格設定は非常にリーズナブルではないだろうか。もちろん本体はスタンドアローン時には通常の真空管マイクプリアンプとして扱うことができるのだが、単体のマイクプリアンプと考えた場合でも音の輪郭が綺麗に出る本機のサウンドのクオリティーはクラスを超えた音質ということができるであろう。なにより異なるプリアンプを使った場合にサウンドの質感に違いが出るという問題を解決することができるので多入出力派には断然オススメだ。

そして、Steinbergの定番DAWソフトウェア、Cubase LEが無償バンドルされ、すぐにハイクオリティーな音楽制作が行えるのもTube Fire8の数ある魅力の1つだ。最後になったが、本体はワードクロックの入出力にも対応しているので、デジタル機器中心のシステムの拡張用プリアンプとして組み込むことも容易だ。

写真6　定番のソフトウェア、Cubase LEが無償バンドルされる

写真7　ワードクロック入出力でデジタル機器との相性も抜群

真空管マイクプリアンプの付いた8チャンネルのオーディオ・インターフェイス、はたまたクオリティーアップを実現する単体の真空管マイクプリアンプとして2つの顔を持つTube Fire 8。どちらがメインかは使う人次第だと思うが、1つ言えるのはサウンドは本物であるということ。このサウンドをこの価格で実現するというのはさすがART。今のサウンドに今ひとつ不満を感じているのであれば、ぜひTube Fire 8のナチュラル・チューブサウンドを体験して欲しい。

USB Dual Pre

税込価格：1万7,640円

☆スペック
●最大ゲイン：48dB
●同時入出力数：2イン2アウト
●入力端子：XLR/TRS（コンボジャック）×2※ファンタム電源対応
●出力端子：1/4" TRSバランスモニター×2、1/8"ミニ・ヘッドフォン・アウト
●電源：USBバスパワー、ACアダプター、9V電池
●動作環境：Windows 98SE/ ME / 2000 / Vista、Mac OS 9.1 / OS X　※いずれもOS標準ドライバ対応
●サイズ(W×H×D)：117×44.5×119mm
●重量：0.59Kg

Tube Fire 8

税込価格：オープン（実勢価格：7万円）

☆スペック
●入力端子：XLR/TRS（コンボジャック）×8、楽器用入力×2
●出力端子：アナログライン出力×8
●ワードクロック：入出力1系統
●サンプリング周波数：44.1KHz, 48KHz, 88.2KHz, 96KHz
●インターフェイス：FireWire400
●最大同時使用可能数：4台（最大32入出力）
●付属：Cubase LE
●サイズ（W×H×D）mm：483×44×366
●重量：6Kg
●動作環境：
［Windows］CPU：Pentium 4 1GHz以上、メモリ：256MB以上、フォーマット：ASIO/WDM※TIもしくはVIA製IEEE1394コントローラーチップを搭載したPC推奨、NEC、Ricoh製コントローラー、USBとのコンボカードなどは非対応
［Mac OS X］CPU：G4以上、メモリ：256MB以上、フォーマット：CoreAudio

■お問い合わせ：日本エレクトロ・ハーモニックス　Tel：03-3232-7601　http://www.electroharmonix.co.jp/